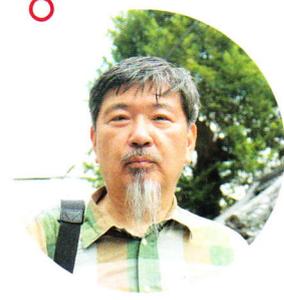


仁丹町名看板を よすがに 秋の京都をひと巡り。

町角に掲げられた仁丹マーク入りの町名看板。ご記憶の方も多いいのではないのでしょうか。
大正期から昭和期、町名表示がない時代には、多く見られた迷い人。町名看板は、そんな人々の悩みに応える、森下仁丹のささやかな社会貢献活動でした。今もなお、当時の名残をとどめる古都の町並みを、藤田眞作さんのご案内のもとにそぞろ歩いてみました。

◎ご案内役／藤田眞作さん



●藤田眞作(ふじたしんさく)
1944(昭和19)年北九州市生まれ。京都大学工学部の学生・助手時代を京都で暮らす。富士写真フィルム(株)足柄研究所勤務の後、京都工芸繊維大学教授。研究教育のかたわら、和菓子を求めて京都市内をウォーキングするうちに仁丹の町名看板に興味をもつ。現在は、湘南情報数理化学研究所(<http://xymtex.com>)を主宰。

京の辻々で 時の流れに寄り添う。

大の和菓子好きという藤田さんらしく、まず案内してくださったのは、「醒ヶ井通四條角にある老舗和菓子店「亀屋良長」。この店の壁には、町名看板が2枚並んで額装されているのです。1枚はおなじみの仁丹マーク入り。「下京区醒ヶ井通四條上ル藤西町」とあります。もう1枚は劣化が進んでいるものの、よく見ると現在の区名「中京区」の表示が。「明治22年の市制施行当時、京都は上京区と下京区の2区制でした。中京、左京、東山が分区されたのは昭和4年のこと。区名表示が現在と異なる仁丹看板は、昭和4年以前に設置された、歴史あるものなのです」。

戦火を逃れた京の町で、今なお町の存在を伝え続ける町名看板。材質がホウロウ製で頑丈あったことも、昔の姿をとどめている理由といえます。和菓子づくりにも使われるという名水「醒ヶ井水」で喉を潤せば、時空を超えた感覚に包まれます。

町の名がはるかな 史実を物語る。

「丸竹夷二押御池」。碁盤の目状になった京都には、通り名を憶えるためのわらべ歌があり、東西に走る通りは丸太町通から十条通まで、北から南へと順に歌われています。「四綾仏高松万五条」。歌のように、醒ヶ井通を四条通から五条通へと進みます。「この辺りは、看



②名水「醒ヶ井水」



①「亀屋良長」の町名看板



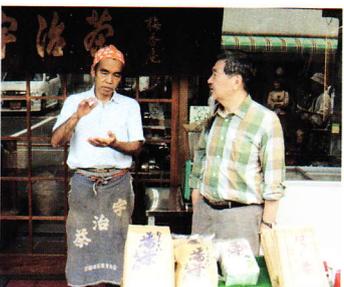
③醒ヶ井通の町名看板



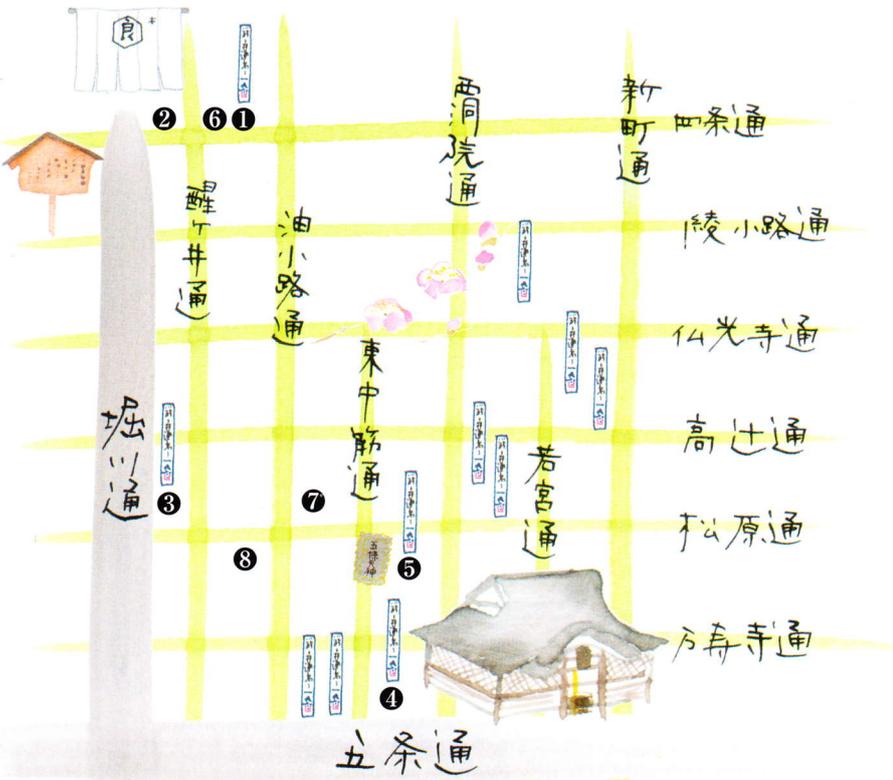
⑥ 亀屋良長本店
創業は享和3年。黒糖入りのこし餡を寒天で包んだ「烏羽玉」は、創業以来の代表商品。店内には喫茶室があり、和菓子手作り教室も開かれています。
TEL/075-221-2005



⑦ 井上漬物店
明治5年の創業以来、親子代々で商う京漬物店。店先には、四季折々の味わいが並ぶ。五条界隈の史跡・名所を紹介した包装紙にもこの店のこだわりがのぞく。
TEL/075-351-1451



⑧ 梅香庵茶舗
日本茶インストラクターの資格を持つご主人が、季節に合ったおいしい飲み方をアドバイス。毎月第3水曜には、伝統ある「茶香服」の講習会も開いている。(見学自由)
TEL/075-351-1205



仁丹マーク入りの町名看板所在地



この五条天神宮のご祭神は、なんと医薬の祖神とされる少彦名命。森下仁丹とも縁の深い大阪道修町にある少彦名神社(神農さん)も、五条天神宮の分霊と中国の医祖・神農氏とを合祀したもののなのです。そこで、松原通西洞院にあるお社へと向かい、健康を祈願すること

伝説の通りに
庶民の息吹を感じて。

「ちよつとおもしろい町名をご紹介しますましようね」と、次に向かった先は万寿寺通。豊臣秀吉による「天正の地割」で新設された東中筋通との十字路の東には、「萬壽寺通東中筋東入天使突抜二丁目」という看板が。「天使突抜」という町名は、五条天神宮の境内を突き抜けて道をつくったことに由来しています。五条天神宮の別名は天使社。天使突抜の町名を持つ区域は、かつての鎮守の森にあたるのだそうです。



④ 萬壽寺通東中筋東入天使突抜二丁目の町名看板

にしました。「義経記には、五条天神が牛若丸と弁慶の出会いの場所として登場します」。藤田さんの義経伝説に耳を傾けながら歩く松原通は、平安京の五条大路にあたります。ふたりの決闘の場所として知られる五条大橋も、現在の松原橋のことか。今では、アーケードのない開放的な商店街が続き、買い物客が行き交う生活道。こうして地元の人々の日常を垣間見るのも、町歩き醍醐味です。看板をめくりながらの古都散策は、奥深い魅力にあふれています。



⑤ 五条天神宮